

技法上さらに分類することが可能である。

a—1類 透孔を2・3・5の各段に計3対もつ。底径が小さく上にいくにつれて開く形態を呈す。

a—2類 透孔を3・5の各段にもつ。形態が寸胴でa—1類よりも焼成が良好である。

a—2'類 形態はa—2類に準ずるが焼成が還元焰作用の強い灰色の焼きであり、異色な存在である。

◎b類 一般の普通円筒埴輪で、第1段突帯は基底部から10cm前後の位置を巡る。透孔を2・4の各段にもつ。朝顔型埴輪・形象埴輪の器台部の可能性をもつ。

埴輪の類型にみる配列状態をみると、出土した埴輪のうちプライマリーな出土状態を示したものはすべてⅡ—a—2類であり、墳丘基段裾部のテラス面に囲繞されていた。墳頂部を囲繞していたと推定されるのはⅡ—a—1類で、裾部よりも量的に少なかったことがうかがえる。朝顔型埴輪のうちⅠ—a類の一部は確実に墳頂面に配置されているが、その他のものについても墳頂面に置かれていた可能性がある。形象埴輪はすべて墳頂部に配列されていたと推定される。Ⅱ—a—2'類は本墳では稀有な例であり、その性格が目される。

(2) 低位置突帯埴輪について 本墳出土のⅡ—a類に属す円筒埴輪は最下段の突帯が著しく低い位置に貼り巡らされたものである。これらの埴輪は低位置突帯埴輪と呼称され、近年にわかに注目を集めている。^(註24)

低位置突帯埴輪の分布は畿内から関東地方にかけて確認されているが、もっとも多く集中しているのは北関東の群馬・栃木両県である。栃木県では既にこの種の埴輪の集成と試論がなされており、^(註25)近年の調査例から12ヶ所の出土地を紹介している。同県では、これらの埴輪は後期古墳のメルクマールとして六世紀後半以降の時期が比定されており、それらの分布範囲が県北及び鬼怒川東岸地域では認められないことから、所謂「毛野国」の勢力範囲に盛行したものであるとされている。

群馬県内出土の低位置突帯埴輪 群馬県下においては太田朝子塚古墳例の他、数例が知られるのみであったが、近年の検討では数量で栃木県を上回ることが明らかになってきた。それらのうち管見に触れたものをまとめたのが第5表である。

これらの出土古墳が前方後円墳に限られていることが指摘できるが、これは栃木県内においても同様の傾向が認められており、低位置突帯埴輪の特徴のひとつになっている。

分布と供給窯及びその年代 県内における分布は太田市周辺を中心に県下南域に広がっているがこれらは各地域ごとに集中しており、それぞれに供給窯を含めてグルーピングすることができる。

もっとも分布の多い太田市周辺では、大前方後円墳を中心に7遺跡で認められている。これらの中には五世紀代の遺跡（朝子塚・太田天神山・米沢二ツ山）も含んでおり、他地域と様相が異なる点で特筆される。^(註26)その後、六世紀末葉に兵庫塚、七世紀初頭に生品二ツ山の出現をみるが、これらの一部に供給したと考えられる北金井埴輪窯跡が操業を開始するのは六世紀後半以降と思われる。^(註27)

金冠塚を含む中毛地区では六世紀前半の前二子以外の墳墓はいずれも後期前方後円墳であったが、この他に特異な例として山王廃寺跡発見の転用施設例があげられる。^(註28)分布の少ない西毛地区では六世紀後半の七興山・堂山稲荷の他、これらの供給窯と考えられる本郷窯跡例がある。県内における

表一 5 群馬県内出土の低位置突帯埴輪

No.	出 土 遺 構	種 別	規 模 (全長・m)	所 在 地
1	金 冠 塚 古 墳	前方後円墳	52	前橋市山王町
2	不 二 山 古 墳	前方後円墳	50	前橋市文京町
3	前 二 子 古 墳	前方後円墳	93	前橋市西大室町
4	七 興 山 古 墳	前方後円墳	145	藤岡市上落合
5	堂 山 稲 荷 古 墳	前方後円墳	50	富岡市一の宮
6	本 郷 埴 輪 窯 跡	埴 輪 窯 跡	—	藤岡市本郷
7	三 郷 9 1 号 墳	前方後円墳	73.6	伊勢崎市波志江町
8	淵 名 双 児 山 古 墳	前方後円墳	82.8	佐波郡境町
9	太 田 天 神 山 古 墳	前方後円墳	210	太田市内ヶ島
10	朝 子 塚 古 墳	前方後円墳	123	太田市牛沢
11	北 金 井 埴 輪 窯 跡	埴輪製作址	—	太田市北金井
12	兵 庫 塚 古 墳	前方後円墳	後円径33	新田郡新田町
13	生 品 ニ ッ 山 古 墳	前方後円墳	76.8	新田郡新田町
14	米 沢 ニ ッ 山 1 号 古 墳	前方後円墳	74	太田市米沢
15	山 王 廃 寺 跡	転 用 施 設	—	前橋市総社町

供給窯は今のところこの二例のみであるが、窯跡の実態が不明である現在確証を得るものではない。
(註29)

低位置突帯埴輪に関する諸問題 栃木県の報告において、低位置突帯埴輪には折り返し口縁の円

筒埴輪がしばしば共伴することが指摘されているが、金冠塚古墳からも本調査において3片の折り返し口縁埴輪を検出している。(PL-16) 管見では折り返し口縁埴輪は現在までに6例確認されており、そのうち5例までが低位置突帯埴輪と共伴することが明らかになっている。しかし、これらが同一個体として発見された例は現在までのところ知られていないが、折り返し口縁埴輪は6世紀末葉以降に位置付けられるので、両者間に系統上のつながりを求めることは可能なようである。

表一 6 折り返し口縁埴輪出土地

No.	出 土 遺 跡	底 位 置 突 帯 埴輪との共伴例
1	金 冠 塚 古 墳	○
2	七 興 山 古 墳	○
3	岩 舟 甲 塚 古 墳	○
4	唐 沢 山 ゴ ル フ 場 埴 輪 窯 跡	○
5	橋 本 古 墳	○
6	美 九 里 村 194 号 墳	?

(註24) ここでは一応基底面から5cm以内に第1段突帯がつくものをいう。

(註25) 森田久男・鈴木勝「栃木県における後期古墳出土の埴輪の一様相」『栃木県史研究12号』(1980年) 各部名称は本例にならった。

(註26) はたしてこうした初期円筒埴輪にみられるものと、後期古墳特有とされる低位置突帯埴輪が同じ系譜をたどるものであるのかどうか明らかでない。その点これらと同じ範疇のものとしてとらえることには問題があるかもしれないが、正確な資料集成が望まれる現段階、これらの解明は今後に残された課題であると考えられることから、ここでは類例としてとりあげておく。

(註27) 前二子古墳の出土品については相川之英氏の御教示による。記して謝意を表する。

(註28) 二次利用施設の可能性がある。拙稿「山王廃寺跡第四次調査報告」考察一特に埴輪転用施設について『礎』8号 前橋工業高校歴史研究部(1978年)

(註29) 註25に同じ。

(註30) 森俊二郎『埴輪研究』第一冊(1973年)